



知って得する、ちょっと差がつく トリビア・コーナー

トリビア研究家 末崎 孝幸

末崎 孝幸氏

1945年生まれ。1968年一橋大学商学部卒業、同年日興証券入社。調査部門、資産運用部門などを経て、日興アセットマネジメント執行役員(調査本部長)を務める。2004年に退職。Facebook上での氏のトリビア投稿は好評を博している。



ボイコット(の語源)

ボイコットという言葉は、1880年頃アイルランドの土地管理人だったボイコット大尉の名前に由来する。大尉はその地域の農作物の管理・販売を任されていたが、その地域の人々は彼を通してしか農作物を買えなかった。彼があまりにも高い値をつけて農作物を売りつけていたため、立腹した住民は「もう彼からは農作物を買わない」と一致団結し、彼からは一切農作物を買わないようにした。農作物が売れなくなってしまったボイコット大尉・・・、最終的にはその土地から排斥されてしまったという。



峠(の由来)

この「峠」という字は「山」「上」「下」から成る代表的な会意文字で、日本で作られた国字である。「とうげ」は昔「たむけ」と言われていたが、室町時代からは「たむけ」→「たうげ」になり、さらに「とうげ」に転じたのである。「たむけ」は「手向け」で、神仏に物を供えるという意味の言葉。峠には道の神がいると信じられており、峠を歩く人が旅の安全を祈って手向けをしたと考えられている。現在でも山を歩いていると、石仏や地蔵が鎮座している峠が多く見られる。



長期投資仲間通信「インベストライフ」

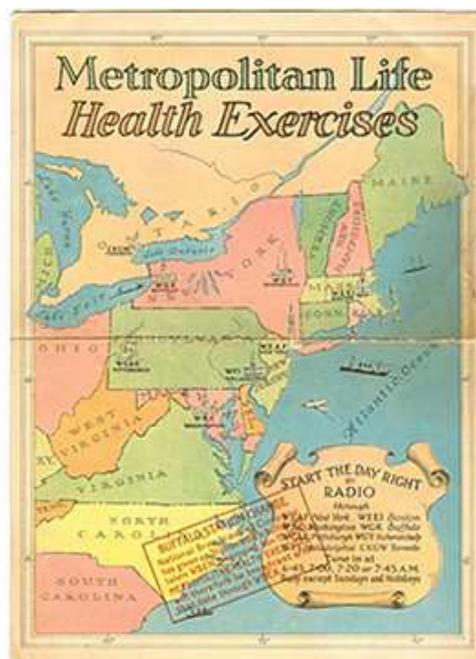
(注)会意文字とは2つ以上の漢字を組み合わせて作られた漢字のこと。例:「日」と「月」で「明」、「口」と「鳥」で「鳴」、「人」と「木」で「休」など。

全然大丈夫

「全然」の正しい使い方は「全然・・・ではない」と否定形でなければならない、との見方が一部にある。しかし、「全然」の元々の意味は、「すべての点で」ということであり、あとに肯定・否定どちらがきても構わない。(広辞苑ほか)一部の人が違和感をもっているのは、このような「すべて」の意味ではなく、「全然おいしい」のように「非常に」「とても」の意味で使う人が増えてきているためだ。以前にはなかった使い方ではあるが、「全然」には「とても」の意味もあるので間違いではない。「全然おいしくない」「全然おいしい」両方ともに使えるという、違和感を覚える人もいるかもしれないが「全然大丈夫」だ。

ラジオ体操(のルーツ)

ラジオ体操といえば日本発と思われがちだが、実はアメリカのメトロポリタン生命保険で健康増進・衛生思想の啓蒙を図るために考案されたものだ(1925年から広告放送としてラジオ放送された)。





長期投資仲間通信「インベストラ이프」

日本では、逋信省が1916年(大正5年)から簡易保険制度を始め、契約者を増やしていったものの、加入者の死亡率が高かったという。そこで、メトロポリタン生命保険が「ラジオ体操で寿命が延びる」と宣伝していたのを取り入れ、1928年(昭和3年)から簡易保険局、日本生命保険協会、NHKの三者が協力してラジオ体操の普及を図っていったのである。

一本立ち

時計がない江戸時代の遊郭では線香をたいて、線香がきれるまでがその人の時間となっていた。延長する時は線香を2本、3本と足していったのである。

つまり線香は時間を測る道具であり、同じ長さになっていた。その名残で今でも線香はほぼ同じ長さになっている。

芸者が一人前になると線香が1本たっている間にお客が飽きずに楽しめるため「一本立ちする」と言われたのである。ここから、独力でやって行くこと、独り立ちすることを「一本立ち」というようになったのである。

御曹司(元々は誰のことか?)

平安時代、宮中や貴族の私室のことを敬って御曹司(曹司はもともと部屋の意味)といていたが、転じてそこに住まう人のことを指す言葉となった。

源平の時代では、平家の子息を公達(きんだち)と呼ぶようになったのに対し、源氏の子息は「御曹司」といわれていた。とくにこの時代は、源義経のことだけを「御曹司」(または九郎御曹司)としており、「御曹司」は義経の代名詞になったのである。